



TITLE:

<大會抄録>宋代の戸と口

AUTHOR(S):

梅原, 郁

---

CITATION:

梅原, 郁. <大會抄録>宋代の戸と口. 東洋史研究 1989, 48(3): 602-603

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154277>

RIGHT:

て始められた「義理經世學」である。曾國藩は桐城派の文人の主張する義理・辭章・考據に經濟を加えることによって空理空論化した宋學を實踐的教學に轉化しようとしたのである。この曾國藩の經世學は、その後張之洞の思想にも繼承されていく。ところで曾國藩の經世思想は、魏源の實用思想に負うところが多く、また曾國藩の尊敬した陶澍・林則徐等の經世官僚は、いずれも魏源を幕友としたことでもわかるように清末の經世學及び經世學者は相互に深いつながりがあった。清末の經世思想及び經世學を研究することは、清末の政治思想及び政策及び政治過程を明らかにする一つの鍵であると思われる。

## 清代の北新關と杭州

### 香坂昌紀

明清時代、大運河や長江等の主要交通路の要衝には、鈔關・常關が設置され、流通過程にある船隻・物資を対象とする徵課を行っていた。清代にあつては、關稅收入は鹽課と共に戶部の重要財源をなしていたが、より重要なのは、國家の關稅收入をはるかに上まわる收奪時人の認識ではその十倍前後という $\parallel$ が流通過程から吸い上げられていたことである。かかる巨額の收奪は、當時の商品流通に、ひいては當時の經濟とその展開に對し、深刻且つ重大な影響を與えたと考えられる。

この問題を追求するためには、差異の顯著な各關の個別的研究を

進め、諸關相互の關連を考察し、廣狹域にわたる商品流通の實態を解明し、これとの關連において關制を理解することが必要である。筆者はその試みとして、蘇州滄墅關と淮安關につき若干考察したところがあるが、今回は大運河最南端、杭州北郊の北新關を取り上げ、杭州の地が江蘇南部・安徽東部・江西東部・福建・廣東の諸地方と水陸兩路により直接間接に連なり、これらの地と大運河を結びつけるターミナルの役割を果していたこと、及び著名な杭州の絹業が省城と周邊地域に展開していたことにより、省城を中心とする日常的な狹域の流通圈が成立していたこと、北新關は大關の他に六關七務十門八口址といわれる據點を有し、廣狹兩域にわたる商品流通を把握し、そこから年額十五萬兩程の正額贏餘を確保していたこと、これに對抗して商民が種々の對策を講じていたことなどについて考察したい。

## 宋代の戸と口

### 梅原郁

周知のように、宋代三百年の戸口統計は一對二と、他の時代と甚だ違ふ比率を残す。わが國では、それについて、男女全戸口記載を原則としながら、漏口その他の原因でこうした結果を招くという説と、男口のみ數値という説が對立した形になっている。また、中國においても根強い男女全口説が存する。

今回の報告において、私は從來觸れられなかった二、三の史料を

紹介し、男口（男子の成丁と未成丁）を根幹としつつも、その中に現在の我々の一般常識では理解しにくい要素が混入しており、それが問題を錯綜させる點を論じてみたい。

まず、これまでの男女全口説は、史料の面から、やはり根據が薄弱であることを述べた上で、宋代の女口と戸籍、とくに女戸の問題を一瞥し、ついで、戸口統計の數字が、全國地方の行政諸段階で、

どのように算出されるかを検討してみる。また、宋代の所謂計帳における戸口の取扱いを調べ、やはり男女全口説は成立しにくいのではないかと論じる。宋の戸口統計の口が、男口あるいは男丁だけということは、この時代の性格を考える上で、かなり重要な意義を含むと思われる、そうした點の見透しといったものにも論及したい。